

「ヤコブ-祝福をつかむ者(2)-」(要旨)

聖書箇所：創世記27章30~46節

【1】 祝福

イサクがヤコブを祝福し終えた直後、エサウが獵から帰ってきました。祝福を得るためのおいしい料理と共に父を訪ねたのです。イサクは予期せぬ事態に「だれだね、おまえは」と戸惑いを隠しません。こうして二人はヤコブによる騙し討ちに気付くのでした。

イサクは次男ヤコブを祝福してしまいました。長男エサウは「声の限り激しく泣き叫び」、更に「祝福は一つしかないのですか」と父に泣き付く様子が描かれています。それに対するイサクの返答はエサウの将来を予見するものでした。「おまえの住む所には地の肥沃がなく、上からの天の露もない。おまえは自分の剣によって生き、自分の弟に仕えることになる。」(創世記 27:39~40) 地が痩せているため農耕に適さず、住民は継続的な争いのため、鋤ではなく剣を常備すると。

イサクは長男エサウの祝福にこだわりました。しかし一連の出来事を経て、「彼(ヤコブ)は必ず祝福されるだろう」(創世記 27:33)と自分の願いではなく、神の御心がなると認めざるを得ませんでした。

エサウは、その気になれば「長子の権利」や「祝福」をいつでも手に入れることができると侮ったことを後悔しました(参照ヘブル 12:16-17)。

【2】 「逃げなさい」

エサウのヤコブに対する恨みと殺意がリベカに伝えられると、彼女はヤコブを家から逃すことで事態の収束を図ろうとします。リベカは聡明で機転の効く人物でしたので、ヤコブには家に留まることで生じうるリス

クを伝え、夫のイサクには夫婦が直面している悩みの種を共有し、ヤコブの旅立ちへの理解を求めました(参照創世記 27:46)。

彼女の計画は、エサウの憤りの収束後にヤコブを家に連れ戻すことでした。けれども実際は、この旅立ちがリベカとヤコブにとって最後の別れとなってしまったのです。

【3】 人の罪と神の救い

イサクの家庭の不和、不信、そして欺きは、遂に殺意へと発展しました。私たちは、この家庭の人間模様から人間の悲惨な罪とその結果である痛みを知らされます。しかしそれだけではありません。人間の計画を超え、確かに成就する神のご計画の存在が明らかにされているのです。

ところで今から 2000 年前、主イエス・キリストに殺意を募らせた人々がイエスを十字架刑へと追いやったことは多くの人が知ることです。しかし聖書はイエスが生まれる 700 年以上も前に、すべての者の咎を負う救い主が来ることを予告していました。

「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」(イザヤ 53:4)と。

人間の計画を超えた神のご計画が最もあらわされたのが、キリストの十字架による贖いのみわざです。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」(1ペテロ 2:24)

▷キリストの十字架を、自分の罪のためであったと信じ受け入れることができますように。

